

特集1 大谷浩 新学長に 聞く



プロフィール
大谷 浩 (おおたにひろき)

1956年生まれ。鳥取県八頭町出身。京都大学医学部を卒業後、1995年に当時の島根医科大学医学部教授に就任し、島根大学の医学部長などを経て、2021年に理事(SDGs、研究推進、産学連携、グローバル化推進、地域連携担当)に就任。2023年11月に行われた学長選挙・監察会議において、新学長に選出された。

元医学部長で、研究推進やSDGs、産学連携などを担ってきた大谷浩理事が2024年4月、新学長に就任しました。地域の知の拠点として、どのような大学運営を目指すのか。ビジョンを聞きました。

世界トップレベルの研究で「知の拠点」の存在感示す
少子化の加速や若者の都市部流出などで地域の活力低下が懸念される中、「知」の集積地である大学の役割が改めて注目されています。教育・研究の拠点である大学には、地域の特性を生かした産業創出やそれに伴う雇用創出、産業界や自治体などと連携した地域課題の解決など、地方を牽引する中核的な存在としての期待が一層高まっており、その期待に応えられる大学運営を目指さなくてはなりません。

元医学部長で、研究推進やSDGs、産学連携などを担ってきた大谷浩理事が2024年4月、新学長に就任しました。地域の知の拠点として、どのような大学運営を目指すのか。ビジョンを聞きました。



材料エネルギー学部の授業の様子

※たたらプロジェクト…正式名称は「先端金属材料グローバル拠点の創出 ―Next Generation TATARA Project ―」

こうした取り組みを支えるため、大谷学長が新たに挑むのが、教員が本来の活動に集中して力を注げる学内の環境整備です。まずは教員が抱える過大な事務負担の軽減に着手。「大学教員は近年、従来の教育、研究、地域貢献活動に加え、煩雑な事務作業に多くの時間を割かざるを得ない状況にあります。新設の材料エネルギー学部で執行部との役割分担の見直しや委員会業務を減らすなど、試行錯誤しています。また、

人とともに 地域とともに 島根大学

*shimadai
広報しまだい
Shimane University
2024.4 vol.57

【特集1】
大谷浩新学長に聞く 01
【特集2】
究める学生 05

vol.57 CONTENTS

■留学生・留学体験紹介 07
■島根大学の研究・地域貢献事業紹介
①医学部 藤田 幸教授 09
②材料エネルギー学部 長谷川 亨 特任教授 11
■社会で活躍する卒業生 13
■しまだい便り 15
■島根大学支援基金より 17
■読者プレゼント 17

企画・制作
株式会社メリット
デザイン
株式会社SAIDO
タイトルロゴデザイン
松陽印刷所デザイン室 森脇 祥吾

表紙／松江キャンパスのメインストリートに立つ大谷浩学長

最先端の研究を地域へ積極的な情報発信にも注力

古代から続く歴史や文化、豊かな食を育む肥沃な土地、たたら製鉄を系譜に持つ材料科学研究など、島根や島根大学には他に類のない特徴が数多くあります。しかし、奥ゆかしいと称される土地柄のせい、か、アピール力が弱いのも事実です。「環境とのバランスを考えた上でのエネルギー問題は今、世界的な最大の課題。例えば、材料エネルギー学部では、地球への負荷を減らせる素材の開発やエネルギー課題の解決という使命も担っていますが、そのメッセージが十分伝わ

ていません。また、山陰研究センターを中心に歴史ある地域の特性や全国につながる地域の課題を踏まえた特色ある研究が行われていることもあまり知られていません。研究の拠点としてもユニークな場であることをもっとPRしていきたいです」。

歴史文化からエネルギーや少子高齢化などの現代の課題まで、さまざまな分野で特徴的な研究を進めてきた島根大学。今後はそれらをSDGsというキーワードでつなぎ、外部へ積極的に発信していくことで、課題解決をリードできる存在を目指していきます。

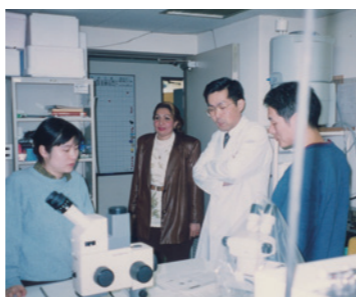
地域産業の振興やイノベーション

の創出、地域を担う人材の育成には、地域や地元企業との連携が不可欠です。島根大学はこれまで地域未来協創本部を拠点に、地域と一体となった教育・研究活動に力を入れてきました。「現場に向かかなければ見えないことも少なくありません。学生や研究者が地域の現場を訪れ、今まで以上に生の声に耳を傾け、地域に学び、最先端の研究を地域に生かせるよう努めていきたいです」。

地域や地元企業と連携しつつ、唯一無二の強みを生かした世界トップレベルの研究を推し進めている島根大学。世界的課題の解決をリードする存在を目指してさらなる歩みを進め始めています。



研究者としての私



公害など資本主義の陰や核戦争の危機がクローズアップされ始めた頃に思春期を迎え、人間について広く考え学びたいと思い医学部に進学しました。人の病気は体の状態だけでなく、社会問題や心理状況も大きく影響します。医師は患者さんの全体を見る必要があると考えています。研究テーマの発生生物学では、数万体もの胎児に向き合い、命は生まれる前から始まっているのだと改めて感じました。

プライベートの私



音楽鑑賞が好きで、クラシックからロック、ポップスまで何でも聴きます。特にバッハのファンで、若い時は研究室でも聴いていました。ヨーロッパに出向いた際は、教会までパイプオルガンの音色を聴きに行きます。食べるのもお酒を飲むのも大好き。かつてはウイスキーなど高アルコール度数の蒸留酒を好んでいましたが、最近は青魚を肴に日本酒を味わうことが多いですね。

DXを全学的に推進していきま

す」。島根大学は医学部を持ちつつ、文系理系がバランス良く配置されている、規模感が程よいのが特徴。身軽だからこそ大学の在り方を捉え直すことに挑戦しやすいのではないかと考えています」。長期かつ幅広い視野で知を創造し、社会に貢献する役割を担う。そうした大学本来の姿を強く意識しています。

SDGsを鍵に連携を強め世界的課題の解決に挑む

学長就任前はSDGs担当理事として、持続可能な社会の実現に

向けた大学ならではの取り組みを推し進めてきた大谷学長。カーボンニュートラルやエネルギー問題、平和などの世界的な課題解決に挑むところが大学の使命ととらえ、これまで以上に注力する決意を抱いています。「国連が掲げた持続可能な開発目標は、一時的なゴールに過ぎません。区切りとした2030年ではありません。区切りはありますが、その先には人類を含むすべての生命体が存在していくための地球がこれからも持続可能なのか、という問いかけが突きつけられています」。

SDGsに加え近年、注目を集めているのが、人類が生存できる領域と限界点を定義する「プラネタ

リー・バウンダリー」という概念。大谷学長は、限界を踏まえた上で目標の実現を目指す意義を強調します。「文明は一度作られたらそれが土台となります。そして、その土台に基づいてより良いものを求める働きが生まれ、加速度的に新たな価値あるものが創造されていきます。しかし、その成果・影響が地球や人間の能力の限界を越えつつあります。SDGsとさらなる持続可能性の実現には、研究者一人一人の意識に加えて、個々を越えた大学全体としての取り組み、世界・地域と連携した取り組みが求められており、今後一層力を注ぎたいと考えています」。

大谷学長に質問!

座右の銘は?

大学とは人が学ぶところです。個として尊重された一人一人の学びと成長が大事です。そのような意味から、お釈迦様が誕生の時に仰られた「天上天下唯我独尊」という言葉を座右の銘にしています。字面から「唯一、自分だけが独り尊いのだ」と誤解されがちですが、元々は個の尊厳を高らかに宣言したものです。この宇宙において自分という存在はたった一つしかなく、全く同様に生きとし生けるもの全てが尊重されるべきです。

健康の秘訣は?

医師・研究者として、体のつくりや各部位が持つ機能、働きなどを徹底的に学んできました。どんな小さな体の構造も、その形や配置のされ方に細やかな意味があります。生きとし生けるものの体内はまさに神秘の世界なのです。そうして体を知っていることが自然と健康への意識へとつながっている気がします。後は健康的な食事とストレスを溜めないこと。やれることを一生懸命やったら、出来ないことはできないと諦めることも大事だと思います。

学生のみなさんへ

今はSNSなどを通して、海外の人と交流することも容易になりました。でもできれば現地に行つて、実際にいるんな世界を見聞きし、多くの人と触れ合い、さまざまなことを肌で感じてほしいです。想像を超える多くの知見や感覚、視野を得られるはずですよ。そのためにも語学は大事です。私は学生時代、英語やドイツ語などのほか、哲学や心理学を学ぶ中で仏典などを原典で読みたいと考え、サンスクリット語を学びました。これらの学びが、現在に至る自分の基盤となっています。



大谷学長のアメリカ留学時代。